

## 『光あれ。』すると光があった」

2020年09月21日

神は言われた。「光あれ。」すると光があった。神は光を見て良しとされた。神は光と闇を分け、光を昼と呼び、闇を夜と呼ばれた。夕べがあり、朝があった。第一日である。(創世記1章3節～5節)

神は最初に「光あれ」と宣言された。すると、光が創造された。神は6日間で、天と地とそこにある全てのものを創造された。万物の創造は、神の言葉による創造であった。聖書の民は、神の言葉が全てを動かしていくと、絶対的な信頼を置いている。彼らは言葉を信じ、言葉が発せられると、その通りに実現していくという基本的な信仰を持っていた。預言者たちは、「主なる神はこういわれる」と宣言して、託された神の言葉を民に告げた。告げられた言葉が実現した時、預言者は真の預言者として認知されたのである。言葉に対する信仰が、三千年も前のバビロン捕囚の頃から、人類史上類を見ない聖書という文書で書き残してきたと言えよう。彼らにとって、言葉は出来事であった。キリスト教が「言葉の宗教」と言われているのは、神の言葉の確かさを根拠にしているからである。パウロは、「十字架の言葉は、滅びゆく者には愚かなものですが、私たち救われる者には神の力です（Iコリント1:18）」と、十字架は出来事であるが「言葉」であると書いている。言葉は出来事で、出来事は言葉なのである。神は「光あれ」と言われると、光が存在した。神の言葉が光の存在を出来事としたのである。この光は、太陽や月や星の光ではない。天体は第四の日に創造されている。第一の日に創造された光は、いわば根源的な光で、神ご自身が持つ光と言ってよいだろう。神はまず、光を創造された。この神の光に、全てのものが照らされ、導かれていく。神は光を見て「良し」と、肯定された。神の言葉による創造は、第一の日から、第六の日まで続いていくが、そのすべての日の創造に対し「良し」という是認がなされている。多神教のバビロン帝国の世界の「混沌」に対して、イスラエル人が信じる神の創造は、「良し」と是認される、秩序と調和あるものであるとの告白である。そして、この光の陰に、当然闇が生じた。闇は神が創造したのではなく、光が必然的に闇を生み出したと位置づけられている。聖書には、光と闇、祝福と呪い、右と左など、二元論的に捉えた記述が多い。そして、私たちの現実には悪や災い、病気や死などの闇に包まれている。しかし、神の創造は光から始められている。闇は光の陰に過ぎない。

ヨハネ福音書は、「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった(ヨハネ1:1)」と、言(ロゴス・キリスト)の神性を宣言し、万物は言によって創造されたと、創世記の創造記述を踏襲している。そして、この言は命であり、命は人の光で、光は闇の中に輝き、闇は光に勝たなかったと、光が人間を襲う闇に勝利していると言う。神は、光と闇を分け、光を昼と言ひ、闇を夜と呼んだ。私たちの常識では、昼と夜は太陽によって規定されているが、光の創造によって時間が生まれた。神は光の下で歴史を導かれるということではないか。「夕べがあり、朝があった。」彼らは、一日を夕べから始め、暗い闇の夜に力を貯め、朝を迎え、日が昇り、光を受けて、力一杯生きて、夕べに一日を終える。

これが第一の日の創造であった。神の創造は、神の「言葉」の発声とその言葉による「出来事」の実現と、それを「祝福・是認」する三つで結ばれている。捕囚の民は、神の秩序ある、また、無から有を引き起こし、「良し」とされた創造の下に置かれた自分たちの生きる確かさを告白したのである。